学級で自己肯定感をどう育てるか――競争・序列のある集団の中で

心の居場所となる学級づくり
――所属集団から準拠集団へ

大阪市立大学大学院准教授　添田（そえだ）晴雄（はるお）

所属集団としての学級

子どもたちは、毎年四月、新しい学級のスタートを経験する。子どもは不安でいっぱいである。顔がこわばっている子もいる。普段と比べてはしゃぐ子もいる。平静を装っている子も、目を見ればわかる。みんな不安である。無理もない。新しい級友のほとんどを知らない。人間関係のとりかたがわからない。以前の学年で同じ学級だった子がいても、新しい学級で以前と同じような人間関係が保てる保証はない。自分の立ち位置が見えない。

「学級」という集団は特殊である。中学校の部活動や社会人サークルといった集団の場合なら、同じ興味関心や志をもった者どうしが自分の意思で集まる。しかし、「学級」の編成には、子ども本人の意思が働く余地がない。自分とはあまり共通点がなさそうに見える他の子どもたちと、むりやり同じ集団に編入させられることになると子どもは感じる。

また、家族や地域のような集団なら、子どもがその集団に入る前に、すでに先輩にあたる人々が互いに人間関係を構築している。そして、多くの場合は、自分だけに愛情を注いでくれるメンバーが存在する。父親や母親、あるいは保護者である。しかし、「学級」の場合、四月のスタート時点では、互いの人間関係はほとんど希薄である。また、自分一人だけにかまってくれるようなメンバーはいない。全員が孤独な立場で学級のスタートをきる。

子どもにとって「学級」は、自分が所属している「所属集団」である。のちに述べるように「所属集団」は豊かな意味をもつ所属集団にもなりえる。しかし、年度初めの「学級」は、子どもたちにとって、単に形式的に所属しているだけという「所属集団」にすぎない。

「心の居場所」としての学級

学級は「心の居場所」でなければならないとよく言われる。この表現が一般に使われるようになったのは、不登校対策のための議論からである（学校不適応対策調査研究協力者会議報告『登校拒否（不登校）問題について――児童生徒の「心の居場所」づくりをめざして』平成四年）。しかし、「心の居場所」が必要なのは単に不登校対策だけではない。学級の中で、子どもたちが自ら人間関係を構築したり、学級を互いに学び合おうという環境にしたりするためには、その基盤として、子どもたちが学級を自らの「心の居場所」と感じている必要がある。

「心の居場所」には、ふたつの側面が必要である。まず、子ども自身が安らげること、安心して活動したり意見を述べたりすることができると感じることである。安心感がなければ、子どもは萎縮し、十分な活動ができず、成長のための経験を得ることができない。

そして、もうひとつが、自己実現の実感の側面である。自分がこうありたい、こうなりたいという理想像に向かって子ども自身が努力し、その結果、自分がその理想像に少しでも近づいていることを自分自身で実感することである。この自己実現の実感は、学級内の他の子どもたちにその成長を認められることによって、さらに確かなものとなる。それが「心の居場所」としての学級の機能となる。

このふたつの側面がそろって、「自己が大切にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感が得られる」（不登校問題に関する調査研究協力者会議『今後の不登校への対応の在り方について（報告）』平成一五年、一七頁）ことが可能となる。

準拠集団としての学級

自己実現は、自分がこうなりたいという自己の理想像を描くことが前提となる。この理想像は孤立した自己からは生まれない。自己の外側に自分があこがれる他人がいて、その他人をモデルにして理想像的な自己像を描け

るようになる。あるいは、ある集団の中で共有されている価値観あるいはその価値観の枠組みを自分の中に取り入れることによって、自分の理想とする自己の像を描けるようになる。

自分の理想像を構築する際に足がかりとなる集団、すなわち、自分の価値観を準拠させる価値観の枠組みを提供している集団、それが、その本人にとっての「準拠集団」となる。

そこでの教師の役割はふたつある。ひとつは、単に所属しているだけの所属集団である「学級」を、できるだけ早い時期に子どもたち一人ひとりにとって自分の準拠集団と思えるような所属集団に育て上げることである。

もうひとつは、子どもたちの中に、自分で自らの所属集団を準拠集団にしていく力を育むことである。この力を身につければ、子どもたちは、次年度以降の新学級でも新しい人間関係を自ら構築していくことができる。そして、将来、社会における集団への参画を自ら効果的に行えるようになる。

さらに、教師の役割をつけ加えるとするならば、準拠集団としての自らの学級を、下級生の子どもたちのモデルとなるように校内で可視化し、発信することである。

個性をつぶす準拠集団

準拠集団が少人数の場合は、多くの価値観を互いに共有するといったことが自然にできる。しかし、数十人の学級集団を、全員にとって、準拠集団とするのは容易なことではない。

年度初めの学級は単なる所属集団にすぎない。子どもたちの価値観や興味関心はばらばらである。子どもたちのあらゆる方面の価値観を学級の子どもたち全員に共有させるために、教師はさまざまな努力を積み重ねる。

たとえば、教師は、学級の中で核となる可能性のある子どもをいち早く見つけ、リーダーとして育つような声かけをしたり、リーダーとして成長するような経験を積ませたりする。また、他の子どもが、その子をリーダーと自然にみなすことになるような仕掛けをする。そして、同時に、リーダーの子どもに対して、教師がもっている価値観を共有してもらうように働きかける。こうすれば、子ども自身による自主的で民主的な手続きを経ながら、教師の価値観が学級全体に広がる。結果として学級の価値観がひとつになる。学級が準拠集団となる。

しかし、ここに危険な落とし穴がある。学級全体が画一的な価値観で覆われてしまうことである。もし、ある子どもが自分独自の価値観に従って個性を発揮しようとすれば、それが逸脱行動として見なされてしまう。集団圧力という手痛い迫害を受けることになる。

このような状態で安易な競争原理が働くと、子どもたちは単一化された尺度の上で序列化されてしまう。学級規模で序列化が進むと、当然のことながら、下位に序列化された子どもは劣等感を感じ、やがてそれは疎外感につながる。上位に序列化された子どもは、次の瞬間、自分が下位に転落しないかという恐怖感をもつようになる。学級は「心の居場所」ではなくなる。個性がつぶされてしまうような集団は「民主的」な学級とはとうてい言えない。

個性が活きる準拠集団

児童の教育に関わっている教員や保護者にとって、高校教育の実態は他山の石として客観的に分析できる素材となる。大都会の高校は極端に輪切りされていることが多い。ひとつの高校内には、同じような学力や価値観をもっている生徒が集められる。特色を打ち出しにくい普通科の高校は、学校間競争に生き残ろうとする戦略として、有名大学への合格者数の増加に指導の重点を置く。余裕のない学校では、部活動や行事は、受験に直結しない「雑音」と見なされ軽視される。学級は受験というわかりやすいキーワードによって強固な準拠集団となる。

しかし、そこにいる生徒にとって、はたして学級が「心の居場所」になっているのであろうか。行事などの特別活動を軽視して、学級の中に学び合い高め合う文化が育つのだろうか。そして、そのような学級文化を可能にする生徒の人間関係構築力が育っているのであろうか。

対極にあるのが総合学科を柱とする高校である。ある高校では、理数、ロボット、スポーツ、言語文化、造形芸術、映像表現といった多様な系列をもつ総合学科を置いている。さらに、演劇や食物文化といった特色ある学科も開設している。生徒は多様である。たとえば英語では、中学校レベルの文法でつまずいている生徒もいれば、TOEFLで高得点をあげる生徒もいる。また、一人ひとりの興味関心も多種多様である。学校の玄関には、陸上の全国大会優勝、全国デザイン・コンクール最

優秀賞受賞などの記念品が並ぶ。ダンスが得意な生徒、日本料理が得意な生徒、英語が堪能な生徒、漫才が得意な生徒と多様である。もちろん、大学合格実績も進学校に匹敵する。生徒はそれぞれの分野で自分なりの尺度に基づいた自信をしっかりともっている。

しかし、価値観がばらばらなだけではない。この学校は校訓として、「進取」「創造」「敬愛」を掲げている。お題目としての校訓ではない。教師は、授業中のみならず、部活動や学校行事、進路指導、などあらゆる教育活動を通して、価値観の共有を指導する。生徒は、この大きな価値準拠枠に従いつつ、それぞれの個性と能力と特性を活かしながら、自分自身の価値尺度に基づいて自己鍛錬する。また、それぞれの分野で輝いている級友に刺激を受けて、さらに自己研磨に努める。文化祭、体育祭、修学旅行など、みんなで一緒に行う行事では、それぞれの個性を発揮しつつ、みんなでひとつのことに取り組む。この学校の生徒は、みんな目が輝いている。

メリハリのある準拠集団

多様な生徒が集まる総合学科は公立の義務教育学校と共通点をもち、準拠集団で共有すべき価値観にメリハリをつけている点で示唆的である。

それは、学級で重視したい価値観を厳選することである。網羅的である必要はない。禁欲的に絞り込む。たとえば、学級の中の多様性を尊重する、それぞれのがんばる姿を称えて、その刺激を受けて自分もがんばる、他の子を傷つける言動は絶対に許さない、などに絞り込む。そしてこれらについては、学級全体で共有できるように徹底的に指導する。それ以外は子どもたちの個性の発揮を奨励する。多様性を尊重する。学級を「心の居場所」となる準拠集団にするには、このようなメリハリをつける覚悟と決断が必要である。